

紛^{まが}いもの考

Originals, copies, simulacra

シミュレーションと戯れる時代

武田 徹

Toru Takeda

Originals, copies, simulacra
シミュレーションと戯れる時代

武田徹

Toru Takeda

CBSシニー出版

紛^{まが}いもの考

武田徹(たけだ とおる)

1958年東京生まれ。

国際基督教大学(ICU)大学院比較文化研究科博士後期課程満期退学。

著書に「948歩目のトレンド・ワーク」「イツ・オンリー・ロックンロール・ジャーナリズム」がある。

全共闘以後の茫漠たる状況を相手とったノンフィクション、

90年代の感性世界を予想させる評論に新境地を開拓しつつある。

紛^{まが}いもの考

1989年9月5日初版発行

武田徹 —— 著者

土屋信郎 —— 発行者

株式会社CBS・ソニー出版 —— 発行所

〒102 東京都千代田区五番町6-2

電話(03)234-5801 振替東京1-65823

図書印刷株式会社 —— 印刷・製本

© 1989 Toru Takeda

Printed in Japan

ISBN4-7897-0459-9

乱丁・落丁本はお取り替えいたします

日本音楽著作権協会(出)許諾第8904601-901号

紛^{まが}いもの考

Dedicated to those who might read
this book in a decade

装帧=菊地信義

1	経験のシミュラークル	13
2	文学のシミュラークル	39
3	天才のシミュラークル	59
4	感性のシミュラークル	83
5	メディアのシミュラークル	103
6	生命のシミュラークル	131
7	意味のシミュラークル	155
8	経済のシミュラークル	179

Originals, copies, simulacra

1989年　いま、きみがいる場所

きみはそんな男ではない。

自然の恵みのような快晴の休日、こんな場所で油を売っている男ではない。しかし、いまきみがいるのは間違いないこんな場所なのだ。この風景には見覚えがない、とききは言うことができない。きみは人工の極みのような遊園地にいて、笑みを終始たやさない風船売りの女の子と話している。遊園地の名は、たとえば「ディズニールランド」。

きみはあたりを見まわす。タバコの吸殻ひとつ落ちていない、無菌室のように綺麗に掃除された大地の上を、ひとびとが行き交う。

きみはなぜここにいるのか。

小学校に進んだばかりの子供にねだられ、きみはここにきた。地下鉄と郊外電車を使い継いで、やってきた場所は、海の香りがするベイエリアだった。モーセが海を割ったように、都市の拡張の論理が海を埋めつつあった。しかし、むしろ広がりつつある大地よりも人工の埋立地の割れ目からのぞいた輝く海面の方にきみは少々感動し、思わずほっと深呼吸をしていた。

「ようこそ、夢と魔法の国、ディズニールランドへ」

駅を降りればディズニールランドの場内放送が盛んに聞こえ始めていた。この言葉は、きみの子供の脳髄に覚醒剤のような一撃をくらわせた。一瞬にして彼は活発な表情に変わる。家にいた頃は、塾の宿題を妙に大人びた顔で解いていたくせに。きみは、なぜかほんの少し罪滅ぼしをしたような気分になる。

ワールドバザールのアーケードを歩くミッキーマウス人形に、きみの子供は握手を求め、パレードのプラスバンドに、かぼちゃの馬車に、追いつこうと懸命に走り出す。

やがてきみの子供はきみを置き去りにして、どこかに行ってしまった。心配はいらないだろうと、きみは後を追わず、さつきから柱にもたれかかっている。

誰かが書いたシナリオの上で遊ばされるのは嫌だ。アメリカ人が綴った「物語」をなぞるなんてまっぴら御免だ。初めはそうかたくなに構えていたきみだったが、次第に考えを変え始める。

なかなか良く出来てるじゃあないか。

コンピュータ制御で、実に精巧な動きをするアトラクションの人形達が、最初の驚きをもたらす。係員達のきめ細かな対応ぶりにも圧倒された。まさにイメージ通りの楽園がそこに出現している。

きみは一人ごちる。

「よくもあそこまで本物みたいな^{まが}紛い物を作るものだ。これじゃ人気が出るのも当然だ」

しかしその考え方が、根本からどうしようもなくひずんでいることに、きみはもつと早く気づくべきだった。

たとえば、こんな例で説明をしようか。

アニメの主人公になったミッキーマウスは、貧乏時代のウォルト・ディズニーが慰みに飼っていた「モーターマウス」という名の鼠を真似て描かれていたという。当初、それは確かに現実のコピーだった。初期のアニメでミッキーマウスは、本物の鼠同様に、いたずらを連発する。

ところが、ミッキーマウスが大衆的な人気を持ち始めるのと同時に、奇妙な現象が起り始める。ミッキーマウスが「鼠らしく」いたずらをする度に、

「子供に悪影響があるからそういうことはさせないで——」

という投書が、ウォルト・ディズニーの許に大量に届けられるようになったのだ。

もはやミッキーマウスは鼠のコピーではなく、アニメの中に作られた世界に、見る者の期待や、欲望に都合よく応えつつ生きるキャラクターとして、大衆に受け入れられ始めていたのだ。アニメ世界は、現実のモーターマウス鼠が悪戯を繰り広げる原作から自立し、大衆の欲望を具現化する新しい物語へと変化し始めていたのである。

そして遊園地であるディズニーランドは、こうしたアニメ世界を精密に模倣して、3D化する手法で作られた。モーターマウスの代から数えると、模倣の模倣とい

うことになるが、最初の模倣はもはや意味を持っておらず、現実がオリジナルで、アニメがコピー、ディズニールランドは、そのまたコピーという孫写しの関係ではなくなっている。オリジナルとの照合関係は、もはやない。

そこは現実から完全に自立した、人々の勝手放題なイメージにそってしつらえられた、まさに「夢と魔法の世界」になっているのだ。

だからディズニールランドが、旨く現実を模倣しているというのは間違っている。ディズニールランドに似た現実があつたとすれば、それは現実の方が、ディズニールランドを真似ていると考えるべきだ。

ディズニールランドのように小奇麗な人工的空間、ディズニールランドのように労働環境が整えられた効率優先の職場、ディズニールランドのように金儲けができるソフト&ハードウェアを総合する商法。ディズニールランドに似た現実が、今やそこそこで見られるようになっていいる。全ての現実が、欲望と期待に応えられるように模造レミエイトされ始めているのだ。

だからディズニールランドからの帰り道は、現実世界への帰還ではありえない。

ディズニールランドの内部空間は、冒険をテーマにしたアドベンチャーランド、西部劇の舞台となるウェスタンランド、未来社会を描くトウモロランド、おとぎ話のようなファンタジーランドの、四つのテーマに沿って区分されている。その事実を知って、ディズニールランドの中には、「今、ここ」という時制と場所に依って立つ「生の現実」だけが欠けているという指摘がなされることがある。

しかしそれは間違いだ。なぜなら「今、ここ」の世界は、ゲートの外に、ちゃん

と用意されているのだ。

きみはゲートを出て、帰るのではない。もうひとつ別の遊園地に入って行くのだ。かすかに聞こえている新しい挨拶の文句を、きみは、無意識に聴き落していただけなのだ。

「デイズニールランドのように紛い物に満ち溢れた世界へ、ようこそ」

きみは、何もかも初めからやり直さなければならない。なにしろ、きみが帰る先に待つ不夜城ブライト・レイツ・ビッグ・シティのような大都市は、ひとつのアトラクションになろうとしているのだ。誰かが、きみを魅了させようとしているのか、あるいは今度は、きみが誰かを魅了させる順番なのかは分からない。とりあえず確実なのは、今までただ自分ひとりのために後生大事にしてきたきみの生活を、見知らぬ誰かの欲望や期待をなぞりつつ複製し続けなければならないということだ。だからはかない。しかし、とにかく魅惑的に眩む。

出直しである。さあ、始めようか。



経験の シミュラークル

愛の n 乗
『フルウェイの森』と『デイライト・スライト・ライト・キッス』